札幌月寒グリーンドーム　5月17・18日

平成6年9月9日
第 9 号
題　字　大館市宗福寺住職
加藤信三老師御染筆
発行所　北秋田郡森吉町本城
浄福寺内
秋田県梅花流師範会事務局
発行者　亀谷健樹
編集者　（広報部）
保坂春聴
印刷所　秋田県鹿角市八幡平字高見田50
㈱グラコン社☎0186-32-2005

初めての全国大会

梅花講員になって日が浅い私にとって、全国大会は夢と思って居りましたが、諸先輩から「参加する事に意義有り」と励まされて初めて参加させて戴きました。

五月十六日御先祖様に合掌して無事をお願いし、午前三時三十分お寺の前より出発致しました。途中梅花主事様、新田寺の講員の方々、福寿寺の講員の方々と御一緒になり青森港に到着。ガイドさん添乗のバスとなり函館港に到着致しました。森町、長万部を通り登別温泉第一滝本館に予定時刻に着きました。「アーキタキタ」とまず一段落。温泉にひたり夕食を頂き、ぐっすり熟睡致しました。

翌十七日待望の大会。壮快に飛び起き空を見上げればすばらしい晴天、正に宇宙への息吹かと大きく深呼吸、改めて感謝致しました。

七時半宿を出発、太陽の光がシャワーとでも申しましょうか、心身を清めてくれた様に思いました。美しい景色を眺めながら一時間半「月寒グリーンドーム」に到着、私達より早く着いたバスの多い事にびっくりしました。正面に祭壇が飾られ又、皆様も笑顔で迎へて下さいました。佛様始め講員の方々のお顔が花の様に見え、これぞ佛様のお導きと心静かに思いました。

大会宣言と共に、詠讃師の方丈様の美声が会場に響き渡り、六千七百余名の御奉詠、何にたとへ様もなく、私は御先祖様又主人が目に浮かび、涙があふれて参りました。一生忘れる事は無いと思います。

主人が歿くなる時、三宝御和讃の内容を自分の事として解釈して聞かされ、断腸の思いでした。今はまだ未熟ながら、御詠歌をお唱えする事に上り、心のなぐさめとなり、さわやかな心境になります。孫が「おばあさんは、佛様の事となると、意気揚揚として、佛様の様に見える、頑張れ」と励ましてくれます。大会に参加した事により、講員としての自信が得られ、本当に有難い事と思っております。体調に留意し、より一層の精進を重ね鈴鉦の響の休む事なき様努力し続けて行きたいと思います。

由利郡由利町
慶祥寺講員　三浦　ナヲエ

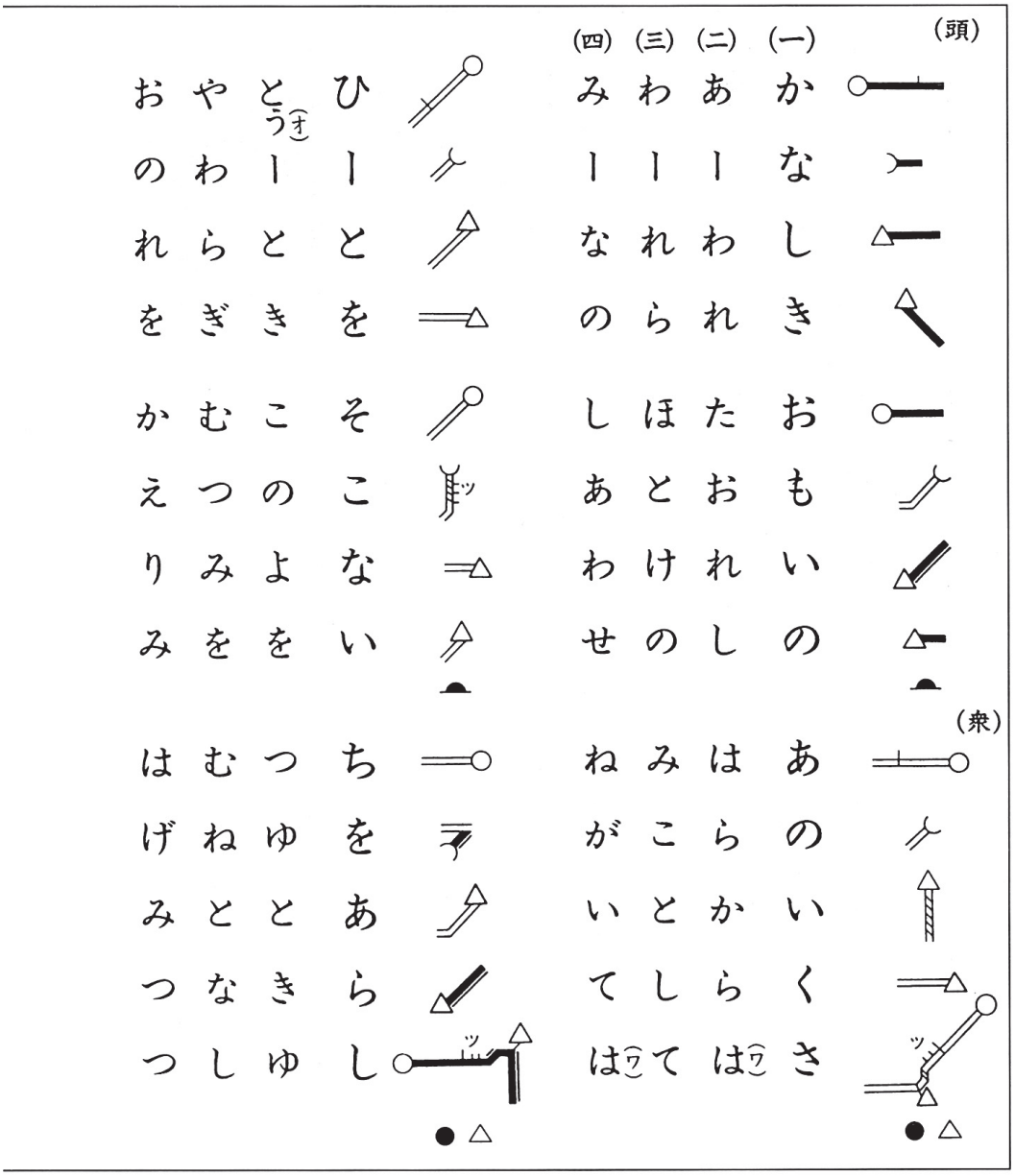
梅花流新曲

平和祈念御和讃

願いをこめて

作詞　辻　淳彦
作曲　白石十四男

拍速四八位



お唱えにあたって

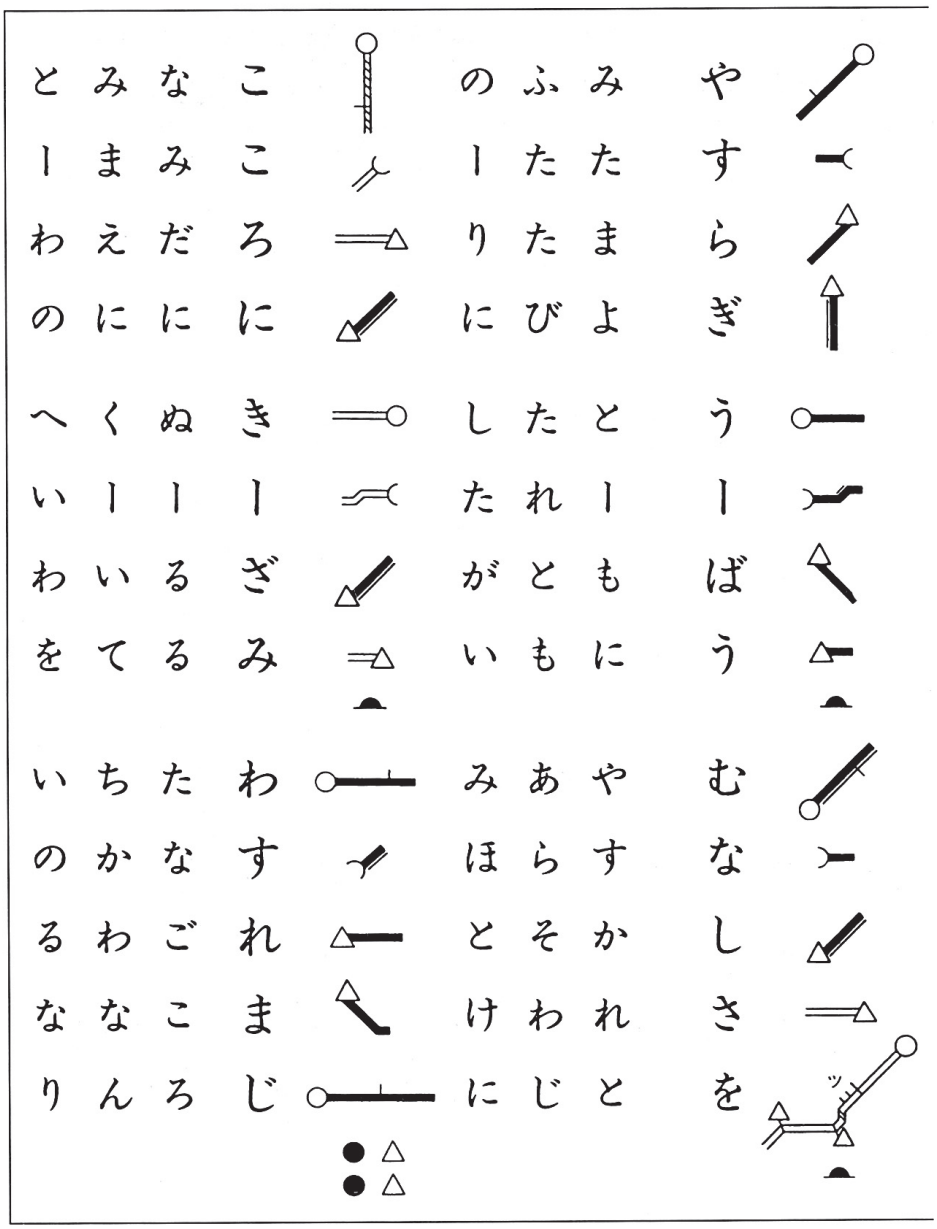
秋田市金足
東泉寺住職
柴田弘一

はじめて「平和祈念御和讃」を聞いた時に、拍速四八って、こんなにユックリだったのか、と思わされたこと。そして歌詞を見ては何と当て字の多いこと。

唱えてみては（おとなえ込み不足を棚に上げて言わせてもらえば）言葉に説得力が感じられないと思うのは私だけだろうか。

作曲については、口をはさむ余地はないが、曲の特徴とも言える出はじめの一拍半と半拍の部分をはっきりとらえ、又言葉のはこびのちがう部分に注意しておとなえしたい。

三番の二行目　やわらぎ
三行目の　たれとも
四番の二行目　おのれを
三行目の　のーりにしたがい
四行目の　とーわのへいわを
など



四行目　　わすれまじ

「ま」のファーソ（3、1）の箇所は柔らかくお唱えして欲しい旨作曲の白石先生が申されておる。（二、三、四番も同じ）お唱えしていて、特にむずかしいと思われる部分はない様に思うが。

一番、二番の歌詞と三番、四番の歌詞は見てのとおり訴えておる意味合いが異なるので同じ曲なのだが、唱える者の意識を変えて、おとなえ出来ればよいのだがと思ったりしている。ウーンナカナカムズカシイナァー

平和祈念御和讃

(一)悲惨しき憶いのあの戦争
人間を害い大地を荒し
安らぎ奪う空しさを
心に刻み忘れまじ

(二)あわれ斃れし同胞は
尊き人生を露と消ゆ
万霊よ共にやすかれと
涙に濡るる合掌

(三)我等ほとけの子として
和ぎ睦みを旨となし
再び誰人とも争わじ
仏前に懺悔て誓わなん

(四)衆生の幸福願いては
己れを反省み励みつつ
仏法に遵いみほとけに
永久の平和を祈るなり

特派巡回を終えて

―拝啓―
お世話になりました

野倉鐵雄

秋田県宗務所は、特派師範が全国で一番多い県であり、梅花に対する情熱は他に比類無きものと伺っておりました。

春以来、風邪をこじらせて、完治せぬまま秋田県入り致しました。特派として今年で十年、こんな状態は初めてです。任に当たって他に譲り難し、声はつぶれても、ぶっ倒れても、好きな梅花三味になれる特派じゃないかと、初心を大切にし臨みました。「声は良し、節は良しとて高ぶるな、真心無きは、下手とこそ知れ」との実感を今回は全身心で有難く味う事が出来ました。又飲食接待には充分注意しなさいという定石を守り、責任を果す決意で望みました。前日、象潟の宿での天然壮蠣の大きさには驚きました。カキは冬の食物と思っていましたから大好物ですが体調を考え、中々手が出ませんでした。方丈様方のご親切なるおすすめを断っては失礼と勇気を出して一つ頂いてみました。……「美味しい！」今頃こんなに甘味のある風味ある生ガキを食したことはありません。二人の方丈様が帰られた後、皿に三個残った生ガキ。恐る恐る一つ食べ、二つ食べ、とうとう全部食べて了いました。夕食になり下の食堂へ。他の泊り客も一緒に頂くのですが、私は特別メニュー。大きな生牡蠣、酢牡蠣、蒸し牡蠣、牡蠣豆腐等々。海の珍味が山盛り、全部頂きました。お腹も驚いたことでしょう。

翌朝、お腹の具合は？快調です。梅雨の入りで小雨が降って居りましたが、気分は爽快でした。お話しによれば、カキは体調を整え体力増進の妙薬との事。（薬のコマーシャルではありません）効用たちまち現じて、体調も快くなり、宿へ到着すると自坊に電話するのですが、私の声が次第に元気になって来たと家族も安心して居りました。一事が万事。大変温かいお心くばりで迎えて下さり、無事日程を消化出来て感謝致しております。一期一会。梅花道の心を大切に只管講習に専念させて頂けました事を有難く御礼申し上げます。

野倉鐵雄先生

講習会の感想は、どこの会場も皆様熱心に受講なされ、伸び伸びとした発声で言葉もハッキリと響きの有る大きな声でお唱えされて、すばらしい点や、少しの誤唱もよくわかり、訂正も出来ますから大変楽しい講習となりました。地元特派師範の諸先生はじめ管内講師の皆様隔講長師の御指導の賜と感じ入りました。お世話になりました各教場の皆様教区長老師並に関係各位に誌上をおかりして厚く御礼申し上げます。巡回中に賜った御芳情、皆様から学んだ点等々その教訓を生かし更に精進致し度く存じます。今後共よろしく御指導の様をお願い申し上げます。

末筆なりましたが、秋田県梅花講と師範会お発展を祈念申し上げて御礼のご挨拶と致します

「身を正し心で唱うる詠讃歌
鈴鉦の余韻に和して貴し」梅芳　謹日

お元気ですか！ 秋田のみなさん

―こんにちは―
勉強になりました

齋藤義雄

六月十四日より九日間の特巡巡回のため、一日早く十三日宇都宮駅より新幹線に、緊張と不安を抱いてのり、あっという間に目的地の秋田駅へ到着しました。

駅では、教化主事師、会場であります宗泉寺老師のお出迎えをえました。特に宗泉寺様には、車で男鹿半島を案内していただき、その車中でのお話しが大変勉強になり心の修業をさせていただきました。

秋田県には、数多く立派な師範の方がおられます。そのもとで、特巡巡回させていただいた幸縁に、深く感謝申し上げるしだいであります。

どこの会場でも講員さんの明るい元気な挨拶となごやかな雰囲気の中で午前中は、新曲の講習、十一時四十五分から、講員の皆さんと、歌入りの体操（皆さんとても、喜んで下さいました。）をし、その後、詩吟（追悼の詞）をさせていただきました。

ここに全文を紹介致します。

追悼の詞

十億の人に十億の母あれど
わが母にまさる母あらめやも
人生は夢の如く亦姻の如し
定めなき生死限りなきの情
なき人をついの別れとともらえど
こころは消えずありし面影
髪髣たる温容呼べども答えず
拈香三拝して泣いて声を呑む

齋藤義雄先生

午後の講習は、その会場によって違いましたが、皆さん熱心にお唱えされ、私自身も、いっしょにお唱えさせていただき、本当に、これが同行同修の道であり、そのよろこびであることを感じながらの講習でありました。

また講員さんは、詠唱はもちろんのこと、作法についても、とてもきちんとされ、その姿から詠讃歌をお唱えすることで一日の生活に生きがいを感じておられるのが、よくわからせていただきました。

これも日頃、各御寺院様始め、師範、詠範さんのご指導の賜物と、ありがたく感謝の気持ちで一杯になりました。

巡回最後の日には、宗侶寺族として、秋田県梅花流師範会の皆様が参加されました。マイクの使用なしで、膝を交えての講習でありました。

午前中は、新曲、午後は、立行、特別所作のある曲、紫雲、歓喜を致しました。旋揺法に入り、梅花の横アタリ、縦アタリ、打ちナミ、基本のアヤと講習をさせていただきました。

皆さん真剣にお唱えされ、その声には、佛まします梅花流の感が致しました。本当に得難い体験の連続でございました。これからも、詠道に精進したいと思っております。

ありがとうございました。合掌

シリーズ おらほの梅花講

耕田寺（こうでんじ）

住所　北秋田郡阿仁町幸屋（第十教区）
設立　昭和五十九年
講長　佐々木賢龍
講員数　二十五名

梅花講が発足致しました時は、比立内の古いお寺で、若い和尚様がお座わりに成ってからのことでした。

七集落から集まるので一緒に練習するためには交通の便も悪かったのですが、協力し合い合わせて集まりました。

初めは十九人で始めた梅花講で一年の暮れには講員は方丈様とで大掃除をし、冬は吹雪で飛ばされた本堂の扉を皆で起こし、又、大雨の日はバケツを所々に置いて御詠歌をお唱えしました。

平成四年の九月に幸屋の新しいお寺が完成し、説法頂き、修行させて頂き、本当に幸せで御座います。お寺で葬儀致しますと、頼まれることもありますが、無報酬で亡き人との別れを御詠歌でお弔い致しますのは、私達の法であると思います。

現在二十五人。合掌、礼拝、挨拶から修行させて頂いて居ります。私ども、早くに入会した講員達はどうにか詠唱致しますが未だに法具を解く、組む等の基本的所作はもちろん、特別所作を勉強致しております。まだまだ思う様には出来ませんが、「心は形を求め、形は心をすすめる。」ということが基本姿勢と学びました。御詠歌を頂載していなかったら今頃は色々な悩みがあっても解消出来なかったと思います。

今、私達講員はお寺の草取りや花植えに奉仕し、み仏様に喜んで頂きたいと頑張っています。善を学べばその姿が映る、と言います。これからも正しい信仰に生き、仲良い生活を送りたいと思います。

紹介者　講員　伊藤トキエ

大慈寺（だいじじ）

住所　平鹿郡大森町字高口下（第十六教区）
設立　平成五年
講長　小野碩應
講員数　三十名

「お経とちがったものだよ。」大学生だった息子が呉れた一本のテープが梅花流詠讃歌でした。

繰り返して聞いているうち言葉では表現出来ぬ感動に包まれ、いつかこのように、お唱えしてみたいと考えていました。たまたま菩提寺のおすすめで「心のハーモニー」を聞く機会に恵まれ、そのすばらしい声にテープとは違った感動を覚え、み仏と、自分だけが存在しているような、おごそかな気持ちになりました。

「感動の消えぬうちに」という希望が段々大きくなりました。ありがたい事に、その後菩提寺の若和尚さまから梅花の教えを受けることが出来る様になりました。

「私達に出来るかしら」と言う話でしたが会うたびに口ずさみ、

励ましあいました。若和尚さまの歌詞のご説明をお聞きし、ますます心ひかれるものを覚えました。

御和讃にくらべ御詠讃は大変でした。

濁りなき　心の水にすむ月は
波も砕けて　光とぞなる

ほこらず　かざらず　その内容は、まさに人生の道しるべだと思います。

新緑むせかえる六月半ば私達は特派師範の野倉先生からお心のこもったご指導をいただきました。「平和祈念御和讃」「同行御和讃」など講師さまの経典の中のお言葉をかみしめながらのお話しは胸が詰まる思いでした。女学生時代を戦中、戦後と過ごした私にとって戦争は絶対繰り返してはならないことだとあらためて思います。

み仏の平和を願う心を一人一人の心の中にお作り下さっている梅花の有難さ！

私はいそがしい中にも月一回練習日に出席できる幸せを今かみしめております。今後ともお仲間と一緒にますます心を入れて練習に励み、梅花の輪を広げて行きたいとかたく決心している所でございます。若和尚様よろしくお願い申し上げます。

紹介者　講員　大坂琴子

福城寺（ふくじょうじ）

住所　仙北郡協和町峯吉川（第七教区）
設立　昭和五十年
講長　佐々木　道　耕
講員数　十五名

福城寺は、静けさの中にあって、春は花夏は草木に風わたり秋は銀杏がみのり、山門には、黄金色の葉のジュータンがが敷きつめたよう。冬は、文字通り白銀の世界に本堂が鎖座します。

さて、始めて鈴鉦を持った時、鉦の音に鈴のひびきに心底まで洗われる思いがし、み仏の前でお喝えすることが、何とも有難く喩えようのない幸せを感じました

ご縁があって、数年前、文化会館で行われた「心のハーモニー」と出会い、朗朗と流れる旋律の中に、み仏の姿を求めて唯々、無量の感激だったことが脳裏を離れません。

講員わずか十五人、上手下手はよそに、練習も本番も一生懸命にやっております。

昭和57年11月、菩提寺の普山式の折、安下所から「三宝で和讃」を唱え、和尚さまをお祝い申し上げたのですが、後に間違いだらけの作法だったと知り、顔をほてらせ苦笑いをした経験がございます。

然しその後には、毎年夏の頃になると、梅花の布教の先生のご指導をうけ、おかげ様で上達の一途を送っております。

ある時、方丈さんは「今日は他所の和尚さんたちが来ないので、少しぐらいは間違ってもよいでしょう」と申されたことがありましたが、そんな時に限って出来栄えがよかったりするのは、皮肉なものです。

常にみ仏と共にお唱えさせていただける気持ちで、頑張っております。練習の合間には、お茶とお菓子をいただきながらジョークが飛び交いストレス解消のひとときでもあり、次への刺激剤にもなります。

うれしくも釈迦の御法にあうひ草
かけてもほかの道は踏まめや踏まめや

この同行ご詠歌の如くの生涯を、たゆまずゆっくりと歩んで行きたいと思います

紹介者　講員　進藤登美子

こころをよむ（八）

達磨大師御詠歌

伝えまし　うけつぎ来たり　有難や
五葉に開く道のひとすじ

伝説の達磨

梁の武帝といえば中国歴代皇帝中最も深く仏教を信じ実践し、保護した太子として知られる。時にインドから達磨という僧が来て禅を通した新しい宗風を唱えていた。武帝は達磨を呼び会見した。武帝「どういうところが聖なる真理の第一のところだろう」。達磨「見わたす限り聖という影もない」。武帝「一体おまえは誰だ」。達磨「知らぬ」。武帝はとりつくしまがない。達磨はさっさと揚子江をこえ小林寺に行き九年間、壁に向かって座禅した。

達磨廓然として有名なこのエピソード、必ずしも正解な史実ではないけれど、このように語りつがれて千年を経ている。「達磨大師と武帝は五～六世紀頃の人、聖徳太子誕生の数十年前の話である。」

一華開五葉

達磨大師の発足から弟子慧可への伝法までをドラマチックに語る、達磨大師御和讃。武帝とのやりとりに続くもう一つのヤマ場は何といっても求道の行者慧可が自らの「かいな」をたち切って志のまことを達磨大師に示すくだり。達磨大師御詠歌はこの場面をふまえて、やがて大師が自分の教えの全てを詩文に託して慧可に与えるその予言が中心になっている。

「私がかつてこの国にきて以来、正しい教えを伝え迷い悩む人々を救ってきた。ひとつの華は五葉に開き、果を結ぶこと自然に成ずるだろう。」と達磨大師は言われた。ところで「一華開五葉」について大切なお示しがある。

正法眼蔵梅花

道元弾師が九十五巻に及ぶ正法眼蔵の中でとくに「梅花の巻」を著わし「一華開五葉」をとりあげている。ここで弾師の本師如浄弾師がいうに、大童山の梅花は、かつて釈尊が教えの全てをそれと示した優曇華にひとしい。「花の晨に片頬笑み」の優曇華は、いま如浄と道元のもとにあって梅華にその姿を代えている。「たちまちに老梅樹が花開く、その時世界の本当の姿があらわれる。春の到来。五枚の花弁をほころばせ一つの梅花が開く。百、千、万、億、無数の梅花が咲きほこる。」歴代諸仏諸祖の数えが梅花の姿で今の世にいっせいに花開く『正法眼蔵梅花』中の圧巻のくだり。道元弾師にとって一華開五葉とは、一華ひとたび花開けば万華それに応ずるように、一度でも真実に目覚めることができるなら世界のすべてが限りない真実と見えてくる様子を表したもの。「雪の夕べに臂を断ち」、生身の命をかけて祖師達の伝えて来た正法の花開くありさまこそ「五葉に開く」ということ。いうまでもなく梅花流の名前もそこに由来している。

ダルマさん達磨大師

おきあがり小法師。七転び八起き。大きなギョロ目で虚空をにらみつける達磨絵。ダルマおとし。開運ダルマ。童謡の「にらめっこ」「ダルマさんがころんだ」等々。もしかすると私達に一番身近な仏教者はダルマさんだったのかもしれない。その形は玩具から遊び唄までさまざまだけれども、そこには共通した達磨大師のおもかげがある。けっしてくじけない不屈の意志。強い信念。目標をあきらめぬ忍耐。

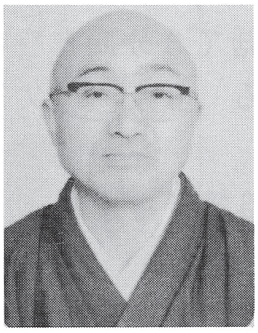
私達にとってダルマさんがかくも親わしいのは、そんな達磨大師のおもかげに対する強いあこがれが私達の胸のうちにあるからではないのだろうか。

鷹巣町
龍泉寺住職
佐藤俊晃

チョット ぶじょほう

梅花がそのまま人となり生きている

合川町
太平寺住職
亀谷健樹



ご詠歌をやっている人に、私は「あなたは何の為に梅花を続けているの？」と聴く事がある。すると「家庭にこもりがちな生活から出て、いろんな人と出会い、学ぶことが楽しいから」とか「佛さまの教えによって、本当の生き甲斐を見出したいから」などの答えをいただく。

そこを私は、さらにひと押しして「結局あなたのホンネはどうなの？」というと、にっこりして「実はボケたくないから」「できるだけ長生きしたいから」などとおっしゃる。私は、それも梅花のゴリヤクのひとつだなと納得する。

ところで先般、山形県庄内地区を布教巡回する機会があった。ある方丈さんにお昼どき、総代さんのお宅に案内された。まずお内佛さまに本尊上供のお経を誦む。ご家族のかた皆さんが静座し一緒にお勤めする。終ってそれぞれ家族の紹介があったが、特に笑顔のたえないお祖母さんは、九十二歳という。お寺での接待と同様に、梅湯のあとお抹茶を一服。そのあと昼食には、お祖母さんの自慢の手料理とこれも手造りの箸袋（千代紙の人形がつまようじ入れ）から取り出した箸で、長生き料理をこころゆくまで堪能した。

その席上のお話しでは、この集落は、二十六ほどの戸数であるが、九十七歳を筆頭に九十歳以上の方が、なんと四人もいらっしゃるとのこと。それはここの水がきわめて良く、お米が最高においしからという。私はお祖母さんに、ボケないで長生きするひけつをおたずねした。するととっておきの三点をお話し下さった。

第一に〈新聞をじっくり読むこと〉四人の長寿者が、みな同様であるという。（テレビでなく新聞であることをご注意―）

第二に〈いくつになっても、それぞれ仕事を持ち、良く働くこと〉年令に即して無理なく自分の仕事を続ける。しかも自ら進んで喜びいっぱいやるのがコツだという。例えば、畑仕事の種まきから収穫まで、手掛けた野菜を材料にしたお茶うけで、客をもてなしたり、たんねんに仕上げた壁掛けや花びん敷きを客間に飾り、それをプレゼントしたりする。とにかくお客様と一緒に、生活を楽しむ工夫をこらすことだそうな。実際お祖母さんの作ったお茶うけを賞味したり、作品を拝見したが、どれも素晴らしい出来栄えだった。

第三に（これはもっとも肝心かなめと思うのだが）〈いつでもどこでも、ご詠歌をくちずさむ。ご詠歌と共に生きる喜びの毎日であること〉お祖母さんは今から三十数年前に、お寺の梅花講に入りご詠歌を教わった。ならいたての頃は、蔵の中に入り夢中になって練習したという。

今でも主な曲はほとんど暗記して、お唱えできるとのこと。まさに梅花がそのまま人となり、生きている感じがした。そのゴリヤクというか、日頃の精進が、そのまま長寿に結びついているのだろう。

私たちは、いまだに詠讃歌を習い、お勤めするとき「何々の為に」とか「何々を得る為に」の条件が先に立ってしまう。しかしそれはまちがいで、梅花道（佛道）と心身ともにひとつになってこそ、始めてほんもののお唱えが出来るといえよう。

そんなことからして、九十二嫗の生き様は、自然に、「ボケない」「ナガイキする」ようにできているのだな、とつくづく思ったことである。

投稿

私と詠讃歌の出会い

秋田市新屋勝平寺梅花講
小笠原　和子

樺太恵須取郡で太平洋戦争に会った。飛行機からの爆弾、海岸からの七色の艦砲射撃の中、母親と幼い私達三人、樺太の山道を逃げ廻っているうちに終戦を迎えた。

その九月十五日に妹を亡くし、亡骸を葬るにもお坊さんがおらず、嘆き悲しんでいる母を近所の叔父さんが、「賽の河原地蔵和讃」をお唱えして慰めてくれました。

何流の和讃であったのかはわからないが、いつまでも心の中に残る和讃であった。

あの時の節回しの賽の河原地蔵和讃を探し求めているところに、勝平寺の奥様からお声をかけていただいたのがきっかけで、昭和五十七年頃から母は梅花流詠讃歌を習うことにしたのです。

その後、母が習う詠讃歌に興味をもちはじめ、日中は職場に勤務しているので勝平寺の奥様にお願いして、平成元年六月に夜の部が誕生したのです。

勤めも時間どおりには終らないこと、夜は暗く物騒であるため、父に車で送り迎えをお願いしたところ、すんなりと承諾してくれましたが、毎回のことで何となく気が引けるため、父に「一緒に梅花を習って見ないか」と、進めて見たところ最初は渋っていたが、一緒に習うことになった。

大正二年生まれの父には、詠讃歌はなかなか難しいらしい、息の入れ方、細かな節回し、調子のとり方等で悩んでいた。

そんな時、禅センターで毎月一回梅花講習会あることを知り、平成四年四月に私達親子も講習を受けてみました。

その日の講師は、渡辺紫山師、富岳正純師により紫雲を懇切丁寧に一つ一つ手を取るように教えていただきました

講師の方々は、個性と体験を基に、課題について、細やかに非常に良くわかりやすく教えて下さり、毎日出席するたびに何かが得られるので感謝しております。

詠讃歌は、最初は優しい気持ちで初めたのであるが、習いだすと奥が深く、ツヤ、イロ何にも見えないアヤがあったり、強弱等々難しいところが数多くある。

今後も、なお一層梅花に精進し、豊かな心を養って生きぬき、報恩感謝の気持ちで頑張りたいと思っています。

講員さんへのおしらせ

☆一泊講習（全教階）の部

10月21日～22日
秋田市四ツ小屋
円通寺様会場

10月31日～11月1日
二ツ井町藤琴
宝昌寺様会場

11月11日～12日
大館市
宗福寺様会場

☆三級検定の部

10月27日（金＝友引）
秋田市松原
補陀寺様会場

お寺様を通して沢山のご参加をお待ちしてます。

テレホン　梅花

0188（73）7676（ナムナム）

24時間いつでも　OK！
あなたの電話で3分間
梅花が聞ける

詠讃・協賛者

東泉寺　柴田　弘一
善徳寺　細谷　裕昌
本宮寺　佐藤　広俊
恵林寺　本間　俊英
徳昌寺　佐々木禅壱
恩徳寺　岩舘　祖芳
玉鳳院　柳川　浩二
以上の各師範

編集後記

お盆には皆様のお手許へと思いながら遅れてしまいました。スミマセン！

終戦から五十周年。大きな節目。『かなしき憶い』ひときわにてお過ごしのお方も多いことと存じます。

戦争を知らない世代が多数を占めた今、永遠の平和の為の「語り部」になって頂きたいものと存じます。

記録的な酷暑続きの年。残暑がまだ続きますとか。

呉々もご自愛下さい。

沢山のご寄稿をお待ちしております!!